

一八八四年二月二十四日(日)

ドツキネーショナル

南神寺院において、ラカール、校長、マニラルたちと共に

タクールはなぜ、我慢出来ないのか？ マニラル・マリックに対する教訓

タクール、聖ラーマクリシユナは昼食の後、すこし横になつて休んでおられる。床にマニラル・マリックが坐っている。タクールの腕には、まだ副木と包帯がしてある。校長が入ってきてごあいさつしてから、マニラル・マリックのそばに坐つた。今日は日曜日で黒分十三日目。一八八四年二月二十四日。ベンガル暦一二九〇年ファルグン月十三日。

聖ラーマクリシユナ「(校長に向かつて) どうやって来たんだい？」

校長「はい、アラムバザールまで馬車で来まして、そこから歩いてまいりました」

マニラル「まあ！ 汗までかかれて——」

聖ラーマクリシユナ「ハツハツハツハ。それだから、わたしや思うんだ。わたしの体験はすべて、頭で描いた空想なんかじゃなかったと！ さもなけりや、イギリス人たちがこんなに苦勞してまで通つてくるもんか！」(訳註——校長たちのように英国式教育を受けて英語を堪能に話す人たを、タクールはイギ

リス人と呼んでおられた)

タクルルの健康について、腕を折った話になった。

聖ラーマクリシュナ「わたしは腕のことで時々、我慢出来なくなるんだよ。いろんな人に見せては、『なあ、よくなるだろうかなあ?』なんて聞くんだ。それでラカールが怒って——。あれは、わたしの境地が理解できない。時々、どこかに行ってしまう^グと思ったり、また思い直してマーにこう言ったり——『マー、ラカールをどこへ行かせる? 俗世の火事場で身を焼かせることなんか、マー、どうして出来よう?』」

わたしが子供みたいに我慢が出来なくなるのは、今日に始まったことじゃない。シエジヨさん(マトゥール氏)によく手を見せてはこう言ったものさ——『ねえ、わたしや病氣じゃなからうか?』って。それじゃあ、わたしの堅信(ニシユク 自分の理想神への堅い信心)はどこへ行つた?——郷里から出てくるとき、牛車のそばにオイハギみたいな男どもが棒を手持って寄ってきた! わたしは神々の名前を唱え始めた。だが、^グラーマ、^グラーマ^グと言ったり、^グドウルガー、^グドウルガー^グと言ったり、^グオーム・タツト・サット^グと言ったり——どれかが効くだろうと思つてさ。

(校長に向かつて)ところで、わたしはどうしてこんなに、我慢が出来ないんだろうね?」

「校長「あなた様はいつも三昧にお入りになって、信者たちのために心をホンの少し体に残しておられますので、それで、お体を守るために時々、我慢が切れるのでございましょう」

聖ラーマクリシュナ「そうだね、ホンの少しだけ心を体に残して、そして信仰と信者を持つてこの

世で暮らしているんだよ」

〔展覧会見物のすすめ——タクルルの動物園見学の話〕

マニ・マリックは展覧会の話をした。

そこに飾つてあるヤショーダーがクリシユナを胸に抱いている像が、大そう美しいという話をお聞きになつて、タクルルは目に涙を浮べておられる。あの母性愛あふれるヤショーダーの像の話で、タクルルは靈意識をかきたてられたのであろう。それでお泣きになつたのだ。

マニラル「あなた様のお怪我がなければ、見物にお行きになれますのに——。要塞広場でやっているのでございますが——」(訳註、要塞広場——現マイターン公園)

聖ラーマクリシユナ(校長たちに向かつて)わたしは行つても、満足に見物することはできないよ！何か一つ見たら、意識がなくなつてしまうもの。それから先は、もう何も見物できない。動物園に連れていつてもらつたことがある。ライオンを見るが早いのか、三昧に入つてしまつたよ！ドウルガー女神の乗り物を見て、神への意識が呼び覚まされたんだね。もう、ほかの動物を見物するどころか！ライオンを見ただけで帰つて来てしまつた。だからジャドウ・マリックの母さんが一度、『展覧会にご案内しましょう』と言つたんだが、後になつて、『行かない方がよろしいでしょう』と言つた」マニラル・マリックはブラフマ協会の古い会員で、年のころは六十五才前後である。タクルルは彼の心境に適したような教訓をお与えになる。

〔以前の話——ジャイナラヤン・パンデイトに会ったこと——ガウリー・パンデイト〕

聖ラーマクリシュナ「学者のジャイナラヤンはとても立派な人だったよ。行って会ってみたら、ほんとに気持ちのいい人だった。子供たちはブーツを履いていたが——。自分で、カーシーに行くと言っていた。言ったことを、とうとう実行したよ。カーシーに住みついて、そしてカーシーで亡くなった。（原典註）

年をとつたら、あんなふうに世間から離れて神様のことを考えた方がいいよ。どうだい？」

マニラル「ほんとでございませぬ。世間の嵐はいやでございませぬ」

聖ラーマクリシュナ「ガウリーは女房に花を供えて拜んでいた。女の人はみんな、ひとりひとりが大実母マの顕現あつわれだからね。

（マニラルに向かつて）あの話をも、この連中に話しておやりよ」

マニラル「はっはっはっは。何人かが舟にのつてガンジス河を渡ろうとしていました。一人は学者で、自分の知識を鼻にかけていました。「私はいろんな経典を学んでいる。ヴェーダもヴェーダーンタも六派哲学も——」そして、ある男に聞きました。「ヴェーダーンタを知っているかね？」『いえ、知り

（原典註）聖ラーマクリシュナは一八六九年以前にこの学者に会っておられる。パンデイト・ジャイナラヤンがカー

シーに行ったのは一八六九年、誕生は一八〇四年。カーシーで亡くなったのは一八七三年。

ません』『では、サーンキヤやパタンジャリは?』『知りません』『哲学の本は何も読んだことはないのかね?』『何も知りません』(訳註—ウエーターンタ、サーンキヤ、パタンジャリ、いずれも六派哲学のひとつ) 学者は、さも得意気に話をし、その男は黙って坐っています。折しも風向きが怪しくなり、やがて恐ろしい嵐になり舟は沈みそうです。その男は言いました。『学者さま、あなたは泳ぎを知っておいでですか?』『いや』『私はサーンキヤやパタンジャリは知りませんが、でも、泳ぐことは知っております』

〔神のみ実在、他はみな非実在——一点に集中しろ〕

聖ラーマクリシュナ「アハハハハ、いろんなお経を知っていても何にもならんさ! この世の河を渡る方法を知っていることが必要なんだ。神だけが実在で、ほかのものは皆、非実在だ。

矢をつがえて鳥の目を狙っているアルジュナに、弓の師ドローナ先生がお聞きになった。『お前、何が見えるかね? ここに並んでいる王様たちが見えるか?』アルジュナは答える——『いいえ』『私が見えるかい?』『いいえ』『樹が見えるか?』『いいえ』『樹にとまっている鳥が見えるか?』『いいえ』『じゃ、何が見える?』『鳥の目だけが——』

鳥の目だけを見ている人は、的を射当てることができる。神だけが実在、ほかはみな非実在。ただ、ただ、こう見ている人こそ賢明なんだ。ほかのガラクタ知識に何の用がある? ハヌマーンも言っていたよ。私は日柄も星まわりも知らない。ただ、ラーマのことだけを考えている」と

(校長に向かつて)——「ここで使うウチワをいくつか買ってきておくれ」

(マニラルに向かつて)——「そうだ、お前、いちどこの人(校長)のお父さんのところへお行き。神の信者(マニラル)を見ると、(校長のお父さんの)霊意識が目覚めるものだよ」

マニラル氏たちに対する教訓——人間としての活動

聖ラーマクリシュナはご自分の座ざに坐まつていらっしやる。マニラルはじめ信者たちは床とこに坐まつて、タカールのお口からでる甘露あまみの法雨ほううを飲のんでいる。

ラーマクリシュナ「(校長たちに向かつて)この腕うでを怪我けがしてから、わたしの心境こころざしはひどく変わったよ。人間としての活動りいどうだけが好きになつた。

永遠えいゑん絶対ぜいたいと変化へんげん相対さうたい(活動)。永遠えいゑん絶対ぜいたいとは、あの完全円満なサツチダーナンダ(サツト・チャット・アイナンダ)(実在・智慧・歎喜あなんダ—ブラフマンの実体)のこと。

リーラーとは、神いししゅわらとしての活動りいらい、諸天善神しよてんぜんじんとしての活動りいらい、人間にんがとしての活動りいらい、世界じやがットとしての活動りいらいだ」

〔汝なこそサツチダーナンダなり——ヴァイシュナヴァ・チャランの教訓——タカールがラーム〕
〔リーラーを見たこと〕

「ヴァイシュナヴァ・チャランは、『神ナラの人間活動りいらいを信まじることができたら、完全な智慧ちゐが得えられるのだ』と言いっていた。その頃は、わたしはそんな意見いけんに耳みみも貸かさなかつた。でも今は、彼の正ただしかつ

たことがわかる。ヴァイシユナヴァ・チャランは肖像画を見る場合も、やさしい表情のや、愛情の表われたものを好んでいたよ。

(マニラルに向かつて) 神様が人間になって活動していらっしやるんだよ。あの御方がマニラル・マリックになつていらっしやるんだよ。シーク教徒は、汝はサッチダーナンダなりと教えている。

一度、自分の本性(サッチダーナンダ)を見たら、人は驚いて口もきけなくなつて、大歓喜の海で泳ぐ。突然肉親(みづか)のものに会うと、そんな気持ちになるものだがね。(校長に向かつて) ほら、いつか馬車で来る途中バブラームにばつたり会つたとき、そんな気持ちになつたよ。ほら、お前もいっしょに乗つていたときのことさ。

シヴァは自己の本性を見たとき、『わたしは何て素晴らしいんだろう！ 何という素晴らしいわたしだろう！』と言つて踊りまわりなさる。

アディヤートマ(ラーマヤナ)にもその話がある。ナーラダはこうおっしゃつた——『おお、ラーマよ。男という男はすべて君であり、女という女はすべてシーターである』と。

ラームリーラー(ラーマの生涯劇を演じている役者たちを見ていたら、ナーラーヤナご自身がこの人たちみんなの姿を借りていらっしやるのだ！)と、こう感じたよ。ホンモノもニセモノも同じような気がしたよ。

処女礼拝(クマリ・プージャ)はどうしてだかわかるかい？ すべての女は、宇宙の大実母のひとつひとつの姿なんだ。清らかな魂の処女に、大実母が一番よく現れているからだよ」

〔病気でタクールが我慢が出来ないのはなぜか？ タクールの子供のような信仰の境地〕

（校長に向かつて）——「どうしてだか、わたしは病気になる和我慢性がなくなる。わたしは子供の状態で置かれているんだよ。子供は何もかも母親まかせだ。」

女中の子が、旦那の子とケンカしながらこう叫ぶ——『ボク、母ちゃんに言いつけてやるぞ！』

〔ラーダーバザールでスレンドラが写真をとってくれたこと（一八八一年）〕

「ラーダーバザールでわたしの写真を撮るといので連れて行かれた。あの日はラジエンドラ・ミトラの家に行くということで——ケーシャブ・センやほかに大勢来ると聞いていたのでね。ある話をしようとして決めていたんだ。ところがラーダーバザールに行ったら、みんな忘れてしまつてさ！　そこで言ったものだ！　『マー、あんたが話すんだ！　わたしやもう話すことがないよ！』」

〔以前の話し——コアール・シン——ラームラルの母——処女礼拝〕

「わたしには智者の素質はないね。智者は自分を偉いものだと思つている——私が今さら病気などになりますか！　」といふ具合に——。

コアール・シンはわたしに言つたよ——『あんたは今だ、肉体からだのことで心配しているんですか？』
わたしの性質はこうだ——わたしの大実母ママがすべてをこ存じじ。ラジエンドラ・ミトラの家で、あ

の御方が話そうとなすつたのだ。その言葉こそがほんとうの話なんだ。サラスワティー(学問の女神)の智識から出る一筋の光線で、千人の学者を嘩然とさせるよ!

信仰者の境涯に——ワイジュニヤニ 覚者ワイジュニヤニの境涯にいるんだよ。だから、ラカールたちと冗談も言う。智者の境涯じゃそんなこと出来やしない!

この境地で、ク大実母マがあらゆるものに成つていらつしやる!と、ミこう観ミるんだよ。四方八方、あらゆるところにあの御方が見える!

カーリー神殿で見たんだ。マーがすべてに成つていらつしやる——悪人にまでも、バガヴァット・パンディットの兄弟にまでも。

ラームラルの母さんに小言を言おうとしたができなかった。あの人も、あの御方の姿の一つだとわかつたからね! 大実母が処女のなかに現れてみえるから、クマリ・プージャ 処女礼拝をする。

わたしの妻は手でわたしの足をさすってくれるが、そのあとでわたしは頭を下げておじぎするよ。お前たちはわたしの足にさわつてあいさつするが、フリダイがいたら、誰もわたしの足にはさわれないよ! 誰にだつて体をさわらせないんだ。

こんな境地にいるから、わたしは皆にあいさつのお返しをしなけりゃならない。

いいかい、悪人だからつて除けることはできないんだよ。トゥルシーの葉は、ヒカ 干酒ヒカらびいても小さくても、神々へのお供えに使われる」